



第5回高橋松之助記念「朝の読書大賞」が決まった。これは、全国の小中高校の中から3校だけを選ぶものだが、今回にかぎり全国4校が選ばれた。東奥日報新聞の記事に次のような記事があった。青森市立浪打中学校の紹介文である。青森市中心部にある同校は、校長、教頭、司書教諭、教員全員が一丸となって生徒たちの読書意欲を高めようと取り組んでいる。図書室の蔵書は約6000冊程度であるが、市民図書館と連携し「青森市民図書館浪打中出張所」を設けるなど地域で協力して読書環境を整えている。また、司書教諭による「図書館だより」は年間100号にも及び、生徒たちの読書意欲をあおっている。司書教諭の阿部裕美子先生は次のように話す。「常に、図書館だよりの原稿を持ち歩き、時間をみつけては、制作しています。あえて、手書きで作っています。新刊本や先生方のおすすめの本などをまとめているんですが、しっかり読んでくれているようで、図書室に設けたおすすめ本コーナーは人気があります」

ところで、朝読書が普及していなかったかつての社会・家庭の状況の中で、小学生、中学生に落ち着いて読書をさせ、それを習慣にまで形成させるためのきっかけを作る場というのは、国語科の授業時間以外になかった。読書の習慣のない生徒を、読書という体験を授業時間の中で味わわせることは、国語科という教科の使命でもあった。たとえば、遠藤周作の「白い風船」、あるいは「少年の日の思い出」（ヘッセ）など。これらは一般に教養小説というジャンルに入るが、ではこのような作品（教養小説）で何を教えるのか。まずは、非凡な凡人の内面のドラマを描いた作品であるから、「内面的世界の広さや深さを知る」ことが挙げられる。次に、「人生の試練に屈しない態度の育成」がある。教養小説は挫折と再起というテーマの繰り返しだからである。3つ目に、「詳細な心理描写の読み方を理解する」ということだろう。心理描写が多いこのジャンルはそれだけ高度な読み方が必要である。この読み方に習熟すると、文学作品を読む楽しさは倍増するといっている。指導目標を明確にした学習によって、確実な読書の習慣がいつそう身につく。

しかし、このように、授業での読書指導について、必ず反対する保護者がいる。限られた授業時間数の中でよけいなことをしている余裕はないはずだ、読書するしないは家庭にまかせておけばいい、という反論である。保護者だけではない。同じ教師にも反対者はいる。それが「教師用指導書」である。週4時間の授業。一年を35週とすると、140時間の国語授業時数。そのうち1時間でも欠ければ、全教材を終了させることができない。だから反対だ、という。変な話だ。流感で欠席することも許されなくなる。そうではなく、140時間の何割がこの教材、というふうに割り当て率で考えなければならない。教科書編集者の考えた目安にすぎないのが指導時数なのである。

## 月の明かり

---

冬の真っ最中に見る月は蒼白く寒々しい。夏は太陽の季節だが、秋は月の季節である。澄みきった空に大きく浮かぶ月は鮮やかである。冬は月が似合わない。月の光も弱々しく、よけいに寒さを演出しているかのようだ。

古来、日本人にとっては月は太陽よりも近く、そして大切な存在であった。月の満ち欠けから時を知る。季節を知る。また、月の明かりは人の心を鎮めてくれる。澄みきった月の明かりは自分自身と向かい合うひとときを作ってくれる。日中は人々と向かい合い、夜には自分と向かい合う。そのことによって昼間の憂いとか痛み、苛立ちや葛藤といったものを客観的に見つめることができ、解消もできる。窓の外の月の光を見つめながら明日への決意もみなぎってくるというものだ。

現代人は人工の明かりで生活を照らす。しかし、いつまでたっても消えない人工の明かりは周囲は照らす但自分の内面を見つめさせてはくれない。それはあたかも昼の延長にすぎない。澄みきった夜の静寂と暗さを伴わないためである。自分と対峙し、自分の心に負けたり乗り越えたりしながら日本人は生きてきた。そういう古来からの日本人は、己と向かい合う時間を失えば、日本人の心はただただ疲弊していくばかりだろう。

心の中に潜むものはすべてが邪魔なものではない。迷いもあるがそれを克服する意志もある。同じように昼と夜とは心の変更線でもある。人は自分の心が生み出す最大の敵であるところのストレスと闘っているのかもしれない。そして、それを冷静に見つめさせるもう一人の自分を際立たせるものが月の明かりではあるまいか。月は本来の自分を取り戻してくれる。

夏の夜は蛾が飛ぶ。蛾は月の明かりを頼りに飛ぶのだそうだ。自分が飛ぶ方向と、それに対する月の明かりとの角度が決まっているらしい。月の明かりとの角度を保って蛾は自由に飛び回ることができる。ところが、そういう月の明かりとは別に、人はかがり火を燃やす。かがり火が大きく燃えるとけっこうな強さの明かりとなる。蛾は人間のかがり火を月の明かりとまちがえて、つまり飛ぶ角度を変えて飛ぶことになる。その結果、蛾はかがり火の中をを目指すことになる。飛んで火に入る夏の虫というわけである。しかし、蛾にとっては非常に大きな迷惑なのである。

ベートーベンの曲に「月光」という曲がある。月の光を浴びた波に揺らいでいる小舟を見て「月光」と名づけたと記憶している。しかし、実際にはベートーベンがつけた曲名ではないということを知った。月の光と名づけられたのは、月光がいかにも神秘的に感じられたからにちがいない。謎めいた雰囲気を感じられるのは、最初のあたりだけで、その後はずいぶんテンポの速い曲が続く。月影というにはほど遠い曲のように思える。

月の光は自分の心を見つめるにはちょうどいいあかりである。気持ちを整理し意欲もわいてくる。月の光は影ともいうが、月影さやかに、という歌の歌詞は見事に月明かりを表現している。徒然草の百三十七段に

「花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは」とあるが、月は満月だけがすばらしいのではない。確かにそう思う。

福島原発事故に対して菅内閣総理大臣は「不合格」というレッテルを貼られてしまった。マニュアルも理解しておらず、専門家に口出しをして遮り、周囲を罵倒してきたという。場当たりの泥縄的な判断と行動でしかなかったと痛烈な批判が起こった。

国民のだれもがそのようには感じていたが、そこまでひどかったとは思わなかった人も多いだろう。私はここで、もうひとつの面から、なぜそのような内閣を生んだのか、背景を考えてみたい。

私の視点は、「コミュニケーション」という面からである。たとえば、メールとかツイッターで暗号のような文字や記号を使ったコミュニケーションが若い人を中心にずいぶん盛んに行われている。それらを駆使する人はどんどん記号を更新して行って、新たな記号や意味を見いだす。その記号がわからない人間は仲間ではない、というやりとりをする。

これらの現象は、その人たちでなければわからないというコミュニケーション圏というかコミュニケーション枠といったものを築いている。そうして彼らは、ほかのコミュニケーション群に対してはまったくの興味を示さない。もちろん、話も通じない。

このコミュニケーションの特徴は、彼らの内側に対しては非常に透明感があり、外部に対してはきわめて閉鎖的であるという点にある。つまり、彼らは異質性には人一倍に神経質である。他者と同じであるという状況を作って、その中で自身を守ろうとしているのだ。

こうして悲劇が起こった。それは言うまでもなく「永田町」である。自分のコミュニケーション圏と他者のコミュニケーション圏。自分のコミュニケーション圏内では菅直人総理以下閣僚はほぼ、あうんの呼吸でやってきた。ところが、外の世界に対しては感覚不全に陥った。これは、福島原発事故後の政治が空白状態になったことが証明している。保安院の、相手がわかろうがわかるまいが一方向的に流暢に説明するのとまったく同じレベルである。

異文化のギャップ、カルチャーのギャップは昔からあるが、それは日本と海外の国との文化のギャップであった。しかし、今、同じ日本の国で大きなギャップが生まれている。そのためコミュニケーションが非常にとれなくなっている。ディスコミュニケーションと英語では言うのだろうが、単なる世代間の断絶ではないのだ。行政関係の専門家と一般市民との断絶、コミュニケーション不能状態は極めて深刻になっている。

このディスコミュニケーションが菅内閣をして「不合格」たらしめた張本人ではないかと私は思う。科学技術は私たちの生命と安全に深くかかわっている。そのため、病院では医師が患者に治療の説明をし了解を得るというインフォームドコンセントが当たり前になっている。ところが、科学技術は生命と安全に深くかかわりながら、ほとんど理解されない。高度な専門知識が必要だから、学者に言われてもちんぷんかんぷんである。専門家と非専門家との間に取り持ってくれる人や機関があればいいのである。いわばパソコンと周辺機器とを結ぶインターフェイスの役割が緊急に求められているのである。

インターフェイス機能が有効になれば、震災への対応はもちろんだが沖縄普天間基地問題と政府とのディスコミュニケーションも解決されるかもしれない。そういう意味で、ニュース解説

者の担う役割は今後ますます重要なものとなっていくだろう。インターフェイスは病院のインフォームドコンセントと同じ機能を有する。

## なぜ人気？ 「平家物語」

平家と源氏。どちらも皇族から臣下に下った。そのとき、天皇が源（みなもと）という姓と平（たいら）という姓を与えた。平氏とは言わず平家とも言う。源家（げんけ）とは言わず源氏とも言う。一般には平氏と言わず平家とよくいうが、平氏を名乗る人々の中の清盛一族を言う場合、平氏ではなく「平家」と言っている。つまり、平家は清盛という特定の一家をさしているということである。

また、平家物語は「平語」ともいい源氏物語は「源語」ともいう。漢語ふうの略称である。音楽性のある語り物としては「平曲」という。「源曲」は存在しない。平家物語はだれが作ったのか、いつ作られたのか不明である。平家物語は最初は「治承物語」と呼ばれていた。治承年間に原型ができたからだろう。この年に源頼朝が平家追討の軍を起こし全国に波及する。平清盛を頂点とする平氏一門の権力が一掃され源頼朝を首領に仰ぐ源氏政権が成立する。ここに古代政治は終わり、中世の武家政治が確立する。

平家物語は次第に成長して、読み物としての「平家物語」と琵琶に合わせて語る語り物としての「平家物語」が生まれる。読み物としての平家物語の代表的なものは「源平盛衰記」であるが、これは平家物語の異本である。

語り物には作者はもちろん、語り手、聞き手がある。この三者が一体となって成長していく。原作者の手から離れると語り手の琵琶法師は同時に作者となる。自分の新しく語りたい願望もある。聞き手の要望にも応えるために新しく付け足すこともでてくる。聞き手には貴族もいれば武士もいる。庶民もいる。知りたいという要望もあれば話題の提供もあった。テレビもラジオもない時代には大きな影響を及ぼした。平家物語がもてはやされたのは当然といえば当然であった。

平家琵琶でいえば、城一（じょういち）という盲目の名人が活躍した。その後流派は分かれ、平家物語のとらえ方に大きな隔たりが生まれるが、その後城一の門人の覚一（かくいち）という天才が現れ、質的に充実したものとなっていく。このように語り手によって隔たりが生まれたため、当初は三巻あるいは六巻本であったものが十二巻本とか十三巻本などに増補されていった。読み本である源平盛衰記も増補され四十八巻でできている。十三巻本は第一部から第三部までの構成で、第一部には平家の興隆とその栄華、源頼政の挙兵と源氏の決起が描かれる。第二部は、清盛入道の死去と木曾義仲の挙兵と平家の都落ちについて、第三部は義仲の死と平家を追撃する源氏、平家の滅亡と後日談となる。最後の第三部は義経が中心となって描かれている。

なお、平家物語では平清盛が途中から「入道」とも呼ばれるが、入道とは髪の毛をそり落とし仏道に帰依しながらも妻子といっしょに生活する人のことを言う。清盛は入道して京都の六波羅に邸宅を構えた。清盛は太政大臣になるがその後辞職して入道となる。51歳の時だと言われている。

清盛の死に際の言葉は次のごとくであった。「当家は保元・平治よりこの方、度々朝敵を平らげ、朝廷から数々の恩賞を賜った。その上、かたじけなくも、安徳帝ご誕生あって、君の御外戚となり、大臣の位まで至り、その栄華すでに子孫に残す。この上、今生の望み、一事も思い置く事

なし。ただ1つ思い置く事としては、かの前兵衛佐頼朝（ぜんひょうえのすけよりとも）の首を見ざる事こそ、誠に不本意なり。我、如何にもなりなん後は、仏事法要をもすべからず。供養塔も立てるべからず。急ぎ討手を差し向け、頼朝の首を刎ねて、我が墓の前に供えるべし。これぞ今生の供養なるぞ」64歳没。

## 文学教材で何を教えるか（1）

---

文学教材で何を教えるか。この記録はもしかするとつじつまの合わない記録になるかもしれない。まず近代小説の歴史をおおまかに振り返りたい。近代小説は、ご存じのとおり18世紀から19世紀にかけて、ヨーロッパを中心にした散文芸術である。家庭と個人の相克（争い）が中心的なテーマになっている。当時の貴族の思想は家系を重視する思想であった。その家系重視の思想から個人（自我）の独立という思想への転換がテーマだといってもよい。この時、「描写」という詩の表現技法と近代科学の観察（もしくは分析と呼ぶべきか）という思想が合体した新しい文章表現技法が生まれた。

たとえばアンダープロット（いわゆる伏線）の活用、そしてその結末の「どんでんがえし」、精神分析による手法などもこのころから生まれた。なお、これらの技法については別の項で述べてみたい。人間の悩みや苦しみ、喜びなど詳細克明に表現し、さらに印刷術も普及したこともあって、作品の技法も確実に発展していった。ここまではまちがっていないはずである。

その後、第一次世界大戦が始まる。この大戦は貴族が姻戚関係を結んでいた各国の支配層にまで対立を持ち込むことになる。当然、文芸作品も大きく変わる。そして、それを機会に、これ以降の小説群を「現代小説」と呼んだ。なお、近代小説のおもなものといったら、スタンダールの「赤と黒」、バルザックの「ゴリオ爺さん」、フローベルの「ボバリー夫人」、フロンテの「嵐が丘」、ドストエフスキーの「カラマーゾフの兄弟」、トルストイの「戦争と平和」あたりが有名だ。

これらの近代小説は、描写で成り立っていると言っていい。描写を「動く絵」と紹介した方がいたが、要するに目に見える（浮かぶ）ように感じさせる表現技法である。しかしながら、描写部分を生徒（中学生）に読ませても動く絵に感じる生徒は皆無だ。なぜなら、人生経験が豊かである人が読んで初めて意味がわかる代物だからである。抽象性、象徴性を理解できない生徒が、描写を動く絵と認識させること自体、ムリなことなのだ。

さて、近代小説はこの描写で組み立てられる。語りといった説明はほとんどない。だから現実の背後には、人によって異なる見方があると思って読まない、描写は無限の会話と無意味な細部描写の連続で終わってしまう。その結果、読者（生徒）はあきってしまうのである。私などはこの年になると、登場人物の名前も一致しなくなり、メモをとって読む始末である。描写が3ページも5ページも続くとは大人でもあきる。これは実は書かれている言葉を信じて読むのではなく、書かれている事実の背後のことが判断できないからだ。だからあきることになる。

たとえば、漱石の「坊ちゃん」がある。人前では立派なことを言っておいて、席をはずすと生徒の信望のない先生がいる。そんな先生の言うことなどだれが信じようか。坊ちゃんを読むとそれがよくわかる。大人でも容易には見抜けない描写の意味を生徒がいきなり読もうとしてもムリだ。

文学教材には、伝承物語、創作童話、英雄物語、伝記、教養小説、近代小説がある。それらを生徒の年代別（学年別）にして読ませることには大いに価値があると思う。読解技術として、場



面ごとの人物の心情を読み取る、といった指導目標を立てた授業が多いし、私も実際やってきた。しかし、一方では、そんなことに何時間もかけるよりも、伝承物語あから教養小説までの代表的なものを体系的に読ませた方が効率的だという考え方も成り立つ。

実際、実業団（企業側）では、学校は生徒に対して、古典と文学教材は不要。論理的な文章を使って正確な読み取り方を指導してほしいというぐらい文学教育には否定的である。また、教師の中でも、内容主義か形式主義かといった見方で文学教材をとらえ、考え方が大きくわかれる場面もある。それらについては、後に述べてみたい。

## 文学教材で何を教えるか（２）

短編小説は、アメリカの作家によって発展した。短編小説という形態は限られた紙面に最大限に作者の意図を実現しなければならないというその長さの制限こそが多種多様の技巧を生ませた。扱うテーマが明確でなければならず、効果は適切で印象が鮮明、全体的統一が緻密でなければならない。そういった特色をとらえさせながら読ませることには、文作作品の指導に大きく役立つはずである。そこで、O・ヘンリーの「二十年後に」を分析的に読んでみたい。いったいどのような技巧が用いられているか。

① パトロールの巡査がひとりで巡回区域を巡視していた。やっと十時になりかけた時刻だが、小雨まじりの冷たい風が吹きまくっていて、街路には人影はほとんどない。その付近は商業地域で、店はもうたいていしまっている。

② が、街の途中まで来たとき、巡査は急に歩調をゆるめた。暗くなった金具店の入り口に一人の男がもたれかかっているのだ。その男のくわえた葉巻には火がついていない。巡査がその方に歩み寄ると、「大丈夫ですよ、お巡りさん。私は友だちを待ち合わせているんです。」と安心させるようにその男は言う。「二十年前ここで落ち合うように約束したんです。その頃ここにレストランがあったんですが。」その店なら五年前に取り壊されたと巡査が言うと、その男はマッチをすって葉巻に火をつけた。その光りで、鋭い目をしたその男の、蒼白い、あごの角張った顔が浮かび出た。右の眉毛の上には傷跡があり、ネクタイピンには大きなダイヤモンドが奇妙にはめられている。その男は次のようなことを言った。「二十年前のちょうど今晚、私は無二の親友のジミー・ウエルズと一緒にここで食事をした。私もジミーもこのニューヨークで育ち、まるで兄弟みたいで、その時私が十八、ジミーが二十歳だった。翌朝私は一旗揚げるつもりで西部に立ったが、ジミーはニューヨークぐらいよい所はないと思い込んで、どうしても他に行こうとしない。そこで私たちは二十年後の今夜、たとえどんなことがあってもここで落ち合おうと約束した。その後私は西部で遊び回っていたので、間もなく音信も途絶えてしまった。しかしジミーは生きている限り、きっとここにやってくるに違いない。あれぐらい頼みになるしっかりした男はいなかったから。」そう言いながら彼は格好のいい懐中時計を引き出して見た。その時計の蓋には小さなダイヤモンドがちりばめてある。「十時三分前だ。私たちが別れたのはちょうど十時だった。」と彼は言った。「西部では相当うまくいったんでしょうな」と巡査が聞くと、「もちろんですとも。ジミーが私の半分ほどでも成功しておればいいんですが。あの男はこつこつやっていく方でしたから。私が一財産作るには随分すばしこいやつと競争しなくちゃならなかったんですよ。西部は人を抜け目のない男に仕上げますからね。」と男は言った。「お友達がきっと来られるように願ってますよ。時間通りきっちりではなくちゃいけないわけですか」「いや、少なくとも三十分は待ちますよ」巡査が立ち去ってから糠雨が降り続き、風がつのってきた。金具屋のドアに寄りかかった男は、葉巻をくゆらせながら約束の友を待った。

③ 二十分ばかりした後で、長いオーバーを着た背の高い男が襟を耳元まで立てて、まっすぐにこちらにやって来て、げんそうに尋ねた。「ボップかい」「ジミーウエルズか」ドアに立

っていた男は叫んだ。彼らは互いに手を握り合った。「やあ、確かにポップだ。二十年ぶりだ。ここのレストランもなくなったよ。ポップ。ここでもう一度一緒に食いたかったんだが。どう、西部ではうまくいってるかい」「すばらしいもんだ。欲しいものはみな手に入ったぜ。けど、ジミー、お前は随分変わったなあ。そんなに背が高いとは思わなかった。二、三インチは高い」「うん、二十歳過ぎてからちょっと伸びたよ」「ニューヨークはどうだい、ジミー」「まあ、まあ、てところだ。今、市の役所に勤めているんだ。さあ、ポップ、俺の知ったところがあるから、そこまで行って昔のことを話し合おう」二人は互いに腕を組んで街路を歩き出した。西部から来た男は、彼の成功に得意になり、今まで彼の身に起こったことのあらましをしゃべり始めた。オーバーに深々と身を包んだ男は面白そうに聞いていた。曲がり角のドラグストアまで来ると、電灯が輝いていて、二人は同時に顔を見合わせた。

④ 「お前はジミーウエルズじゃない。いくら二十年一昔だって鷲鼻が獅子鼻に変わるはずがない」「その間に善人が悪人になることが時々あるんだ」と背の高い男が答えた。「ポップ、お前がこっちに立ち寄るかも知れないと通知があった。シカゴの警察がお前に用があるんだ。おとなしく一緒に来た方がいいぜ。署に行く前にお前に渡すよう頼まれたものがある。ここで読むがいい。パトロールのウエルズからだ。」西部から来た男は、手渡された紙切れを開いてみた。読んでいくうちに彼の手は震えた。それには簡単にこう書いてあった。

⑤ (ポップ、ぼくは時間通り約束の場所に行った。君が葉巻に火をつけるためマッチをすったとき、それがシカゴで捜索中の人物の顔であることがわかった。君に縄をかけることはぼくにはできなかった。そこで刑事に行ってもらった。ジミー)

さて、①の部分が、この物語の導入部。まず登場人物が紹介され、物語の発端の状況が提示され、背景が描かれている。登場人物はパトロール中の巡査。時刻は夜十時になりかけた頃で、場所は早めに店を閉じる商業地区。そこを巡査が巡視している。

②の部分は展開部である。「街の途中まで来たとき、巡査は急に歩調をゆるめた。暗くなった金具店の入り口に一人の男がもたれかかっているのだ」という箇所は、読者のサスペンスをかきたてて、読者に思わず先を読み急がせる。サスペンスという言葉は、解決や結果を待っているときのような、通常なんらかの懸念とか心配をとまなう不安定な心的状態の意味である。

ここで、Oヘンリーの名人芸ともいべき伏線（アンダープロット）の張り方を見てみたい。②の部分の始めに第二の人物ポップが登場するが、作者はなぜ夜の、店じまいをした商業地区の暗い店先をその舞台に選んだのだろうか。いうまでもなく、巡査のジミーの顔やジミーに見せかけた刑事の顔がポップにはわからないということが絶対に必要であったためである。しかしジミーにだけポップの容貌を見せるために、ポップに最初火のついていない葉巻をくわえさせ、マッチをすったときの光りで、傷跡のある鋭い人相とネクタイピンの不似合いなダイヤを浮き出させて、ポップがシカゴの犯人であることをジミーに確認させている。

①の小雨交じりの冷たい風、②の終わりの糠雨が降り続き風がつのってきた という背景描

写は、③でジミーを装う刑事に長いオーバーを着せ、その襟を耳元まで立て容姿を隠してポップに合わせるための伏線となっている。

## 泣いて馬謖（ばしょく）を斬れるか

---

マルチ商法疑惑の山岡賢次国家公安委員長、沖縄少女暴行事件知らずの一川防衛大臣。非常に困った事態である。野田佳彦総理大臣が「ノーサイド」と言ってスタートした民主党政権なのに、必ず何人かの人が足を引っ張る。消費税を上げるといえば、まず与党の民主党が反対。結局何も決まらない。特に、先に挙げた二人について、任命責任はあるのだろうが、総理大臣も輿石幹事長も、あの二人がたとえ忠実な部下であったとして、泣いて馬謖を斬れるかが当面の課題となっている。何も物事が決まっていけない中、大阪のダブル選挙では橋下氏が当選した。物事を決めやすくするのが政治家の仕事とかなんとか言いながら。

ところで、泣いて馬謖を斬る、とは、三国志の「蜀志馬謖伝」の故事にある。蜀の武将の馬謖が街亭の戦いで、諸葛亮（字は孔明）の指示に背いて敗戦を招いた。その責任をとって馬謖は処刑されることになるが、馬謖は諸葛亮の愛弟子であり、他の武将からも「馬謖ほどの有能な武将を」と慰留する声が上がった。しかし、諸葛亮は、軍律の遵守が最優先だ、と涙を流しながら処刑に踏み切った。このことから、どんなに優秀な者でも私怨私情で法や規律を曲げて責任を不問にすることがあってはいけないという意味で使われている故事である。

亮為政無私。馬謖素為亮所知。

及敗軍、流涕斬之、而卹其後。

※ 政（まつりごと）を為すこと私無し。馬謖素（もと）より亮の知る所と為る。

軍を敗るに及び流涕して之を斬り、其の後をあわれむ。（その遺族を援助する）

先の二人が馬謖に値するかどうかは別として、野田総理大臣の判断を注目したい。

## ビートルズはわれらの同胞か

---

「何もございませんが、どうぞ召し上がってください」と日常的に言う。ところが、外国人は、何もないのに何を食べるの、と不思議に思うそうだ。まったく外国人ほどめんどくさい人種はいないと腹立たしくなってくる。同じ人間なのになぜこうも話が通じないのか。外国語を勉強しようとしている人はいっそう腹立たしいに違いない。

このことを英語の先生に質問すると、たいていはこう言う。日本語は主語や述語を省略しても意味が通じるでしょう。英語は省略できないのよ、と。しかし、これでは説明にはなっていない。ではなぜ日本語は一部が省略できて外国語はできないのか。

地球上には大きく二種類の言語がある。島国の言葉と陸続きの言葉の二種類である。ある学者が、島国の言語をアイランド・フォームと呼んだ。陸続きの言語をコンチネンタル・フォームと呼ぶ。この二つのどこが違うのか。アイランド・フォームは島国特有の言語だ。島国だから余計なことまで言わなくても意味は通じる。だから、陸続きの国でも、家族同士の場合などはアイランド・フォームの言語を用いることになる。

余計なことは言わなくても意味が通じる。あとは以心伝心である。それがアイランド・フォームの言語だ。その典型は俳句だと思う。イギリスも島国。だからアイランド・フォームの言語を使っている。そう思うとイギリスに愛着がわく。イギリスといえばビートルズ。ビートルズの4人はわれわれ日本人と同じ言語分野だったのだと思えば誇らしくなる。

一方、陸続きのコンチネンタル・フォーム（アメリカなど）の言語は、必要なことはしっかり言葉に出して言わなければならない。言わなくてもわかるだろう的なことは許されない世界だ。だから「何もないのに何を食べるの」といった疑問が出てくるわけだ。コンチネンタル・フォームだったら仕方がないか、と思えば腹立たしくもなくなる。むしろ同情してしまう。そして、それよりも世界のビートルズが実は我々日本人と同じスタイル言語にいることに改めて感動してしまうのは私だけだろうか。

国語の勉強法は、学校はもちろん学習塾で教えるものだと思っていたが、実はそうでもないらしい。国語を教える学習塾はなかなかない。公文式学習はあるが、公文式教室では学習プリントを積み重ねる方法であるから、直接話を聞くことが難しいようだ。そこで、客観的にとらえた国語の勉強法を記録しておく。

国語の勉強というと、市販の問題集を解いていけばいい、と考えている生徒・保護者が圧倒的に多い。私はそれは少し違うと思う。実際に2～3冊購入して確かめてみた。すると、正解と不正解との幅がありすぎるのだ。どう見てもこれが正解、こちらはまったくの誤答と、はっきりしすぎている。しかも、正解となっている選択肢をよく読み返してみると、論理的に不都合が出てくる場合もある。これは入学試験問題には出せない、という問題が堂々と書かれているのだ。そういった問題集は買わないほうが断然いい。私は、友人から尋ねられたとき、問題を解かなくていい、問題文をていねいに読み通すだけでいい、と答える。問題を5問解く暇があったら問題文は4～5ページ以上も読める。つまり、私が言う国語の勉強法の基本中の基本とは、「文章をたくさん読む」ということに尽きる。読んでいない子どもは読むのが遅い。読む量が多い子どもは読むのが速い。つまり、速読とは読書量に比例する、ということだ。速く読めれば早く問題に取り組める。というより、文章を速く読めるということは字面をただ読んでいるのではなく中身を考えながら読む、その速さが速くなるという意味だ。ただ上辺を読んでいるのでは意味はない。文の意味、段落の中心箇所、指示語の内容、その主張の背景や理由、筆者の主張、事例を紹介している理由、そういったものを黙って読みながら考え、判断を下しているのだ。それが多読、速読の成果である。だから、国語の勉強は「読み」である。漢字の練習や語句や文法が主たる勉強と思うのは大間違いだ。

そうやって読んでいる小・中・高校生の子どもは、意味がどうしてもわからない言葉に必ずぶつかる。そのとき、いちいち辞書で調べたり、お母さんに聞いたりしないほうがいい。まずは読み終えることだ。その文章を読み終えた後で、さっきのわからなかった言葉の意味を調べたり聞いたりするのがよい。これは私自身、生徒を前に数ヶ月かけて試した結果だから自信をもって言える。読み終えるまで調べるな。これが私とその子どもと親との約束事であった。

では、何を読めばいいか。教科書は学校で読むから別に考えなくていい。自分で購入して読むのに応えてくれる本、それは「全国高校入試問題正解」（旺文社）だ。こう言えば旺文社の宣伝マンみたいだが、要するに高校でも大学でも、「過去問を読め」ということだ。なぜか。それは、入試問題だけあって設問ひとつひとつが論理的にしっかりしているからだ。正解は必ず1つだけ。そして、そのために綿密で論理性がしっかりしている。どう考えてもそれしか正解はない、という問題だらけだ。文章を読む。問題を解く。中には解けない問題も出てくる。その場合、すぐ模範解答は見えてはいけない。見ても、二回目に正解できるかというのできないのが普通だ。なぜか。模範解答を見ているだけで「理解」はしていないからだ。だから、できない問題があったら、最後まで残しておけばいい。残しておいて後でじっくり取り組むのがよい。

しかし、ここでもう一度再認識してもらいたいことがある。問題は、解けても解けなくても実

力にはならない、ということだ。問題を解くということは、自分を試しているだけであって、それ以上にできるようにはならないのである。

ここで、入試問題を解くテクニックを確かめる。これは学校でも教えているかもしれないが、設問に対する正解は、その設問箇所の前5行以内にあるということだ。これも、実際に試してみたから自信をもって言える。というよりすでに学校の先生から聞いているだろう。それと、選択肢の問題で正解するには、書かれていないものを消していく、つまり消去法が最も安全だということだ。くどいようだが、自分にとって易しい文章は読んではいけない。時間の無駄もはなはだしい。高度な文章、難しい文章を読むに限る。国語ができるという生徒の大半は難しい文章を読んでいる。ただし、わざと難しくしている文章もあるので注意が必要だ。悪文は読まないことだ。アタマが疲れるだけだ。そういう悪文がなぜ出てくるか。それは、単に順位をつけるためにすぎない。そういう悪文にはまらないように気をつけて、難しい手応えがある文章をひたすら読む習慣をつけてほしい。これが国語学習のすべてである。



どの教科でも大差はないと思うが、授業を展開する場合、教師が教材の意を受けて一方的に学習課題を設定してしまう場合が多い。そして、それを学習問題とはいわず、学習課題としてしまう。ここに多少の問題があるのだが、それはさておいて、教師は教材解釈を行い、指導事項を精選し、指導過程を組む。そして、より効果的な指導法を用いて授業に臨む。その教材に関わる生徒の反応を事前に調査し、生徒の思考の傾向をある程度把握し授業の前と授業の後との比較ができるような調査問題を作成・実施し、授業の有意差を調べるといったやり方もある。しかし、いずれにしても生徒主体ではない。生徒が個別に考えたり集団で話し合ったり検討したり学級全員で検討して解答を導くといった活動は必ずしも保障はされていない。確かに生徒を主体とした活動を念頭に置くとき、その所要時間は教師主導の2倍以上になる。個人学習、集団組織的学習、一斉学習、整理的学習という指導の流れを持ち込む方法もかつては流行したが、どうしても時間はかかる。文部省からは、週あたりの授業時間数も減少される。そのため、生徒中心の活動はどうしても敬遠されることになる。

ここで私が問題視したいのは、いずれの授業を展開したとしても、学習課題（あるいは学習問題）を解決することだけが授業ではないということだ。私の場合の教科は国語であるが、単なる謎解きのような授業になったり、理屈っぽくなって作品の持つ雰囲気に触れることがないままに終わってしまう授業は、何のための学習であるのか、わからなくなってしまうということだ。文学作品の読み取りは、あくまでも主題に迫っていくための読みとりである。作品の奥底に隠されている価値あるものに触れてみるという姿勢を身につけることに、確かで豊かな読解能力が育まれる。ノート上半分に本文を視写する。ノート下半分には、読んだときの自分の判断を書く。「このおじいさんはおびえているのだろう」などと。そして、それが数時間後には「恐怖心」などの語句に置き換わっている場合もある。いずれにしても生徒本人の学習活動の記録である。前に掲載した、文学作品を伝承文学などの体系に分けた読書中心の指導とはまた異なる指導の妙味である。

小集団活動を経ても、個人学習を経ても、とにかく一斉授業（全国でもっとも多い形態）の場において自分の考えを持って臨むことのできる生徒がいてこそ、学習は成り立つ。そこに意見のやりとりが生まれ、適切な教師の発問や指示が生まれる。生き生きとした板書もできあがっていく。そういった授業（特に国語）

を見てみたい。そういう授業はすべて生徒中心の発想から生まれたものである。

以前、小学校の教科書にある「飛びこめ」（トルストイ作 小学4年教科書掲載）を中学校で授業したことがあるが、小集団活動を入れたため配当時間数が8時間になった。今となってはとても懐かしい。その当時私の友人で数学教師がいたが、その先生は、一つの問題に対して、幾様もの手法を生徒に与える。複眼的な見方を生徒に教え、多面的な見方や思考ができるようにという願いからであった。その成果が上がって、数学ではかなりの好成績で入学試験を合格させていた。このような見方で考えたらどうなるか、という固定観念にとらわれない指導。私の理想とする授業方法であった。

## 君子豹変とふるさとの再生

---

平成23年12月15日現在、33万人余の被災者が公営住宅や仮設住宅で避難生活を送っている。震災による死者は1万5千人を超え、3500人近い人がなお行方不明である。また、福島から他県に避難している人はおよそ6万人と言われる。そういう人の中には、自力では生活再建が難しい高齢者や一人暮らしの方も多し。温かなだんらんとはほど遠い思いを抱いている人が多いことを改めて胸に刻んでおきたい。

復旧・復興のためには強い指導力が欠かせない。指導力を発揮し統率のとれた態勢で困難に取り組まねばならない。しかし、政治の混乱、意思決定の遅れに被災地の失望感は大きい。消費税は上げない、国民の生活が一番と謳ってきた与党民主党。2年後か3年後には消費税を10パーセントに上げる方針を示した。まさに君子は豹変すの故事のとおり野田首相の決断である。

ここで、君子は豹変するという故事を誤解してはならない。易経にあるように「君子豹変、小人革面」とは、立派な人物は、自分が誤っているとわかれば豹の皮の斑点が黒と黄色ではっきりしているように心を入れかえ、行動の上でも変化が見られるようになる。反対に、つまらぬ人間の場合は表面上は変えたように見えても、内部は全然変わっていないという意味である。ころころと立場が変わってばかりいる、という誤解をしてはいけない。立派な人物であるほど、自分が誤っているとわかればきっぱりと言動を変える。過去のことにとらわれずに変身する。それが野田首相の方針でもある。公約を無視した発言と言われるが、実態に合わない現実を変えるには、まさに君子豹変の気構えが必要となろう。

来年早々の通常国会には、議員定数の削減と国家公務員の給与削減、独立行政法人改革案も提出される。まずはこれらを実行して、その上での消費税論議であってほしい。被災から9ヶ月余り。復興への道のりは長く、課題は山積したままである。それでもふるさとの底力と人の絆を信じて復興と再生への確かな歩みを重ねてほしい。

## 明確な理念を抱くことの大切さ

---

私の義兄に優秀な歯科医がいる。歯科医を開業してから1日に150名程度の患者に診断・治療を施す。たった一人の医師に5人の看護婦、2人の歯科技工士を抱えていた。毎日150名前後の患者に追われながらも、研究だけは怠ることがなかった。歯科に関する原稿依頼も相次ぎ、午前3時か4時までは机に向かって原稿を執筆していた。4時に就寝して6時には起床する。それから再び診療が始まる。そういう日々が十数年は続けられた。

患者は増加の一途をたどっていたが、そういう多忙を極める中で、原稿の依頼も次第に多くなり、歯科医を対象にした書物が何度となく出版され、そのたびに全国に講演に出かけた。そういう義兄も現在は70歳を超え、趣味の渓流釣りを唯一の楽しみとしてご夫婦そろって釣りの旅に出かけている。釣りや絵の収集が趣味の大半である。1枚数百万円の絵がいくつも部屋を飾っている。棟方志功を血縁にもつそんな義兄の、教師の私に対する言葉は常に一貫していた。教師はまず先に、自分自身の教育理念を明確に持たなければならない。それは自分の歯科医という職業に対する理念でもあったと思う。私はそういう指導と助言を受けて、教師は権威をもって、自らの言動を通して教えることである、ということを教育理念に掲げている。それはある大学の教授の言葉でもあった。自らの言動を通して教える。このことはその後の私の教育活動を支える原点となり、今に生きている。

教育理念にはさまざまある。全人教育を掲げる人、個性尊重を訴える人、自主自立とか自然尊重とか労作教育などである。しかし、その一方では、子どもには個性は不必要である、そう考えて行動しなければ教育もしつけも成り立たないという主張もあった。児童中心主義や子どもへのおもねりを払拭しなければ、我慢する力は身につかないとする主張もあった。我慢する力（我慢力）をつけることこそ必要であるから子どもの自由を制限しなければならないという主張まであった。

さまざまな立場から発せられる主張、理念。教師の権威とは、言ってみれば教師の誇りでもある。教師の教師たる証明でもある。その誇りや責任をもって、見ている生徒に対する毅然とした言動を貫くことによってのみ教育は成り立つと私は確信していた。「教」はもちろん、「育」が急務であるという認識でもあった。

義兄は、待合席がどんなに混雑しようが、一人一人の患者に向かって、なぜこうなったか、なぜこのような治療を施すのか、この治療の結果どうなるのか、を逐一説明していた。そして、特筆すべきは、治療の技能は天下一品の腕前だったことである。緻密で正確で速い。それは群を抜いていた。神業に近い治療であった。そのため、患者数は日一日と増えるばかりであった。新しい治療法を本に著し、全国に出版する。全国から講演の依頼を受ける。そういった繰り返しがあったため、患者に対しては常に謙虚であり、難しい治療と処方には人一倍の執念を発揮した。

現在も酒を酌み交わすたびにごとに、歯科医のなすべきこととは何か、教師のなすべきこととは何かということについて思いを巡らせ、今後の展望を示唆してくれる。

福島原発事故に対する中間報告が発表された。（平成23年12月27日）多くの問題が指摘されているが、そのうち主なものをまとめておきたい。

まず、メルトダウンはなぜ防げなかったのかという問題である。メルトダウン及びメルトスルーという事故は、作業員が原発のそれぞれの機能を確実に認識していなかったこと及び運転操作の習熟不足が最大の原因だったという。特に、非常用復水器は電力を失われた場合、手動で動かすことになっているが、そのことを作業員は認識していなかった。直流電流は通っているという前提に疑いを持つ人間は誰一人としていなかったという。つまり、システムの本質を理解していないし、共有されてもいなかったことが最大の原因であることが明確にされたといえる。もしもこれ以外の災害が起こったらという認識で準備さえしていればメルトダウンは防げたと報告された。

次に、放射線が拡散したとき、放射線の強い方向に避難する住民が多く見られたことについてである。SPEEDI（スピーディ）という避難誘導用システムで放射線の動きはとらえていたが、それが活用されないまま大災害につながった。なぜ活用されなかったのか。原子力安全保安院は、無用の混乱を招くおそれがあるから、としたが3月23日になってからようやく公表されている。福島の住民はそれまで330マイクロシーベルトという高い線量の中で何日も避難していたのである。危険が迫っている住民にだけでも知らせて避難させれば混乱は防げたという。これは、政府に住民の命と尊厳を重視しなければならないという意識が希薄だったことが最大の原因であるとされた。災害を想定して単に訓練をすればいいのではなく、今何が起こっていて自分にできることは何か、何をしておくべきかをイメージして動くことが大切であり、形だけの訓練は避難訓練としてはまったく役に立たないということの事例であった。

次に事故後の対応に問題はなかったかという点であるが、福島第一原発の5キロ先にオフサイトセンターという施設が作られ、そこが中心となって災害に対処することになっていた。その施設に保安員が常駐していたのであるが、放射線を防ぐためのフィルターが壊れていて施設内の放射線量が高くなったこと、センターまでの交通機関が遮断されたこと、停電もあったことで、その施設に常駐することができなくなり機能は完全に不能となったという。センターが使えないため、管理は総理官邸の地下にある危機管理センターと5階にいる首相と担当大臣との場所だけとなった。しかし、双方の連絡はとれていなかったのである。総理官邸の中に情報の入手ルートが確立されていなかったことも明らかにされた。

次に、津波の備えがなぜなかったのかという問題であるが、柳田邦男氏によれば、東京電力では10メートルを超える津波が来る可能性はありとすでに試算していたという。しかし、そのための準備には数百億円の費用がかかるということと、設備ができるまで4年間かかるということで見送られてしまった。しかし、実際の原発の施設では配電盤に水が被らないようにすることで汚染はかなり防げるのだそうである。その配電盤も防水設備がなされていなかった。そうして13メートルの津波に飲み込まれてしまったわけである。

人間は自分に都合が悪いものは考えようとしない傾向が強い。そのため想定外のことは考えな

なくなってしまう。畑村洋太郎委員長が言うには、防災訓練とは想定内の災害に対処する訓練だが、防災だけではなく減災という考え方も同時に重要であるという。減災とは想定外の災害への対応である。来年の夏の最終報告書が待たれる。

## 秋入学について思う

---

東京大学では、入学する時期を秋の9月ごろにするという話がある。ほかの大学も秋入学に変更するところが多くなるに違いない。外国人もできるだけ入学しやすくするためらしい。すると、高等学校を3月に卒業して、大学に入学するまでの約半年の空白期間をどうするかという問題が出てくる。

私は、その半年という期間は新入生にとってきわめていいチャンスだと思う。半年の空白ができるニュースで聞いたとき、夏目漱石の「道草」を思い出していた。漱石の「道草」は、主人公の男性が何かと奥さんとすれ違う。そして腹を立てたり悔やんだりしている。養父がカネをせびりに来るなど厄介なことが延々と続く。主人公は学者であり、しなくてはいけないことが山ほどあるのだが、日々のゴタゴタに巻き込まれて「道草」をくわされている。そういう現実を作者はじっと見つめている。日常のゴタゴタそのものが「道」の味付け役になっていることもわかる。

高校の卒業から入学までの間の六か月間を日々のゴタゴタに巻き込まれて生きなさい、と言っているわけではもちろんない。偉そうなことを言う身分でもないが、だれにでも道草の経験はあるはずだ。小学校に通うとき、近道をしようかとか、道に落ちているものを拾って友だちと競ってみたりとかの経験はあるはずである。近道を通るということは、どこかのお屋敷の庭を歩くことになったり、畑を踏みつけたと言われて逃げ帰ったりと、スリル満点の楽しい思いをしたはずである。だから学校も休まずに通えたのかもしれない。

このような経験は多くの人にあるはずである。中学校とか高校に進むと、病気で休む人も出てくるし、家庭の事情で長期欠席をするといった人も出てくる。しかし、そういう道草は、必ず何かの役に立っている。休んでいたおかげで絵の勉強ができたとか、クラシック音楽を聞きまくったとか。そういうことを経験したおかげで自分なりの特技を持つことができ、仕事に生かすという人も多い。人に後れをとることのくやしき、つらさを味わったことによって、弱い人の気持ちがよくわかるとか、生とか死について深い洞察力を持てたとか、いろいろな意味をもってくる。

目的地にいち早く着くことだけを考えている人は、道草の味を知ることがない。そして、大学に入ってがんばっている人を見ると、頭角を現す人はそれなりに結構な道草をくっていることがわかる。

漱石の「道草」までは無理だとしても、日常のゴタゴタを客観的に眺める視点を持てる可能性があるというだけでも、入学までの六か月間は無駄ではないし、自分を磨く絶好のチャンスと思う。寝袋と米を袋に詰めて、自転車で無銭旅行をするのもいい。そういうひもじい旅をしながら働くことの尊さ、お金の大切さ、日常の思い通りにいかないことの多さ、人との接し方など、数えればきりがないだけの体験をすることができる。体験はその人を強くする。

しかし、そういう体験を発表させようとする大学であってほしくはない。半年間の体験発表となると、そこには必ず評価が存在する。すると、いい評価を得るためにという邪心が働く。そういう体験は体験の名に値しない。評価の好きな日本であるだけに老婆心ながら気になってしまう。純粋な道草をくわせてやるべきだ。

## 蝶の季節と森林

---

日本は家の新築ラッシュになっても山の森林伐採はあまりない。外国からの輸入木材の方が値段が安いので、建築には専ら輸入品を使用する。日本の木材も安価なのだが、外国のはそれ以上に安い。そのため、日本の森林はいつも豊かである。

二月も終わり三月に入ると、雪が消えかかる。そのころから山を巡り歩く人が増える。ほとんどの人は溪流釣りだが、私の場合は蝶の卵の採集である。枝に米粒ほどの大きさと黄色く見える卵をナイフで枝の皮ごと切り取る。黄色の卵はキアゲハとなる。蝶の中ではギフチョウが好きだ。羽の裏側の模様が交互に伸びているのはヒメギフチョウで、貴重な逸材である。以前は東北以北には生息していないと言われ続けたが、札幌の藻岩山で発見されて以来、北海道に渡る人も多くなった。ウスバサイシンとかカタクリなどの食草も確保されているので当分の間、絶滅することはない。三月は蝶の愛好家にとっては心が躍る季節である。そして、森林が伐採されないことを切に望んでいる。

目的の蝶を採集するには、その樹木の下に生えている食草を探すことだ。初めのうち、どの草が何という名の草かもわからないため、スケッチをし、植物の名前を調べて記入し、位置情報を入れた地図を作る。それを持ち歩いているうちに、一目で植物が見分けられるようになる。パラフィンの三角紙を準備し、昆虫網があれば手軽に採集することができる。展翅板の蝶はいつ見ても美しく、飽きがこない。

さて、森林も福島の方ではセシウムなどの放射能のせいで、樹木に触れることができなくなったが、しかしそれは人間の都合であって生物を無視した話である。福島に生息していた昆虫がどうなっているのか、調査結果を公表してほしいものである。

もともと森林は、その働きから二方面に分けられる。環境という働きと資源という働きである。実際には区別することなどできるわけもなく、樹木を伐ると資源の場となり、伐らずに残すと環境の場となる。その森林は、樹木を中心とした生物の複合体で成り立っている。工場や農地に相当する林地は、単なる木材の生産だけではなく環境そのものでもある。

環境の場としてもっとも大切なことは、森林を形成している生物の命を守ることだ。その基本となるのは時間である。たとえ数年の寿命しかない樹木でも、そこには過去数百年、数千年という先祖の生きた時間の凝縮によって現在の命が生存しているのだ。

ところが、人間は一斉に植林し、一斉に伐り出すので、森の生き物たちも、いったんそこで滅んでしまう。植林後の多くの時間は生育に時間が割かれる。そして成熟した森の時間は短い。それに対して天然林はどうか。切り抜きをして次世代の樹木を残す。そのため森が途切れることはない。

セシウムに覆われた森の昆虫は死滅してしまったのかどうか分からない。生まれてくる幼虫が奇形であるかもしれない。どのような植物にしても、カリウムとカルシウムは欠かせない。セシウムやストロンチウムはカリウムやカルシウムに似ているから、植物はそれを摂取してしまう。その結果DNAが損傷する。DNAには修復機能はあるが完璧ではない。そのため、奇形となって現れる可能性は高いと思う。もっともひどい目に遭っているのはネズミである。外部からも内

部からも被曝している。いずれにせよ、福島森の再生には百年単位の時間を要するだろう。



## 東京の巨大地震

---

東京や大阪に巨大地震が起こった場合、どうなるだろう。多くの人があれこれと想像しているに違いない。震度7の揺れで家財道具のほとんどは倒れ、それらの下敷きになるかもしれない。あるいは外に出たとたん塀がくずれたり屋根瓦が落ちてきて、その下敷きになるかもしれない。道が陥没して動けなくなっているところに電信柱や家の壁やガラスが崩れ落ちてくるかもしれない。しかし瓦礫で埋まっても何とか自力で助かる人は多いだろう。5階、10階のマンションに住んでいる人も崩れかけた階段を何とか降りてくることもできるだろう。

建物は崩壊しても命だけはなんとか守ることはできるかもしれない。しかし、電気は消え水道もガスも止まる。あたりは暗闇に沈み、気温も下がる。その場に立ちつくしていることもできないから、やむを得ず避難所に向かう。車は散乱し街路樹は倒れ、マンホールからは水が噴き出している。家屋や塀の崩壊による瓦礫が道をふさぐ。道路には大きな段差や割れ目ができている。そんな中を必死で近くの避難所となっている小学校に向かう。飲み水もなければ暖を取ることもできない。着替えもなければ財布もない。要するに、何もできないのだ。自力でできることは何一つないのである。自宅で寝たきりの病人や老人は、逃げることもできずそのまま命を奪われるかもしれない。

電気、水道、ガスといったライフラインはすべて行政のサービスである。サービスをお金で買ってきたのである。行政サービスの質を高めることに没頭してきた日本は、人間の自力で回復する能力を奪い続けてきた。人間は絶壁を見ないようにするために遮蔽物を造り、その絶壁めざして歩んでいる、といった内容の文章を読んだ記憶がある。行政サービスという遮蔽物を造ることで安心を得る。一方ではそのサービスによって人間の生きる力をそぎ落とす。川の水を見ても、どうやって浄化するかその方法がわからない。材木はあってもどうやって発火させるかその術を知らない。

こうして、避難民はペットボトルの水を待ち続ける。暖房を待ち続ける。毛布を待ち続ける。ただひたすら待つしかない。自力で何とかするといっても何一つできないのだから。すべて行政サービスに任せてきた日本人は、何もできない自分を見限って、じっと天を仰ぐしかないのである。

食べる、排泄するという人間の生きるための営みを止めることはできない。そのため上下水道の完備が施されてきた。したがって、その設備を失ったときは人間が死ぬときでもある。安心、便利、快適という社会システムは「生きる力」を奪う装置であった。千年に一度と言われた東日本大震災は、こうした教訓を残していった。しかし、そういった教訓を生かそうとする取り組みは依然として見られない。

隣近所同士でいいから、小さなコミュニティを作って、互いに支え合う体験の場を設けなければなるまい。単にどこに逃げるかという避難訓練ではなく、飲み水がなくなったら、電気が止まったらといった当然考えられる条件を設定してご近所同士で助け合う、知恵を出し合うといった場を設定することによって、少しでも生きる力を取り戻せるかもしれない。避難所の暗闇の中で

、いつまで待ってもペットボトルもおにぎりも配られないとしたら、小集団を作って役割分担を決め、食糧を求めて活動する以外にない。どこに行ったら飲み水が手に入るのか、それを早く解決しないと命は持たない。そういった危機が迫っているとされているとき、東京スカイツリーにうつつを抜かしていいはずはないではないか。

## 腹立たしい出来事

---

歳をとると、腹立たしいことばかりが目について困る。まずはNHK。民放はともかくNHKは受信料を国民から徴収して成り立っている。コマーシャルで稼いでいるのとは訳が違う。ニュースを見る。女性のアナウンサーも結構多い。天気予報の予報士も女性が多くなった。見ると、そのほとんどがミニスカートである。最近、流行しているらしい。女性はおしゃれしたがるからミニスカートを身につけたくなる気持ちもわからないわけではない。まるで競うようにミニスカートのオンパレードが続く。

しかし、学校の教師の目で見るととんでもないことになる。全国どこの学校でも校則を決める。ズボンの裾の幅やスカートの丈のルールを決める。膝頭の見える長さは校則違反となる。そういう校則を生徒たちはきちんと守っている。不良グループはそういった決まりを無視する。だから不良グループでいられるのだ。

こうしてルールを守る子どもたちは、アナウンサーの話し方、ニュース内容を注意深く見る。話し方は学校での発表会に応用されるし、ニュースは壁新聞などに活用される。勉強のために子どもたちはテレビのニュースを真剣に見ている。

そういう純朴な子どもたちの目にミニスカートのアナウンサーの姿はどのように映るだろう。「こんな格好して大丈夫なの、お母さん」と尋ねる子どもが多いという。職場にもルールはある。ルールというより常識とでも言うべきものだろう。その常識が覆されている。非常識を受信料を払って見ている日本国民が私たちなのである。おそらく、法律上なんら違反しているものではありません、といった答えが返ってくるだろう。法律上の違反に該当しないことなら何でもありという感覚がすでに常軌を逸している。

小学生の社会の教科書を見る。すると、カラー写真がたくさん掲載されている。東京都心の空中を高速道路やモノレールが走っている。人々が住んでいる頭上を何トンもの大型トラックが猛スピードで走っているのだ。アメリカでもイギリスでもフランスでもドイツでも、都心の居住区に高速走路はない。昔から地震の多発する日本であるのに、家の上が道路だなんて常識では考えられない。怖くはないのだろうか。普天間飛行場から飛び立つアメリカの軍用機。家の屋根すれすれに飛んでいることもある。騒音や危険で沖縄の人は基地反対を叫ぶ。しかし、危険なのは沖縄ではなくむしろ東京都内ではなかろうか。阪神大震災で高速道路は崩壊した。確率として東京の方が断然危険である。阪神大震災と同じことが東京では起きないとだれが言えるだろう。

この4年以内に巨大地震が起こるといふ。それなのに、東京スカイツリーを造る。それも今年の5月に完成するのだそうだ。予約客でいっぱいらしい。巨大地震が怖くて行かないという人も数多い。しばらくは東京方面の出張は見合わせたいという会社もある。修学旅行を東京や関西以外に、という学校も増えている。危険だと言われているのに敢えて飛びこんでいく学校もあるまい。

しかし、学校以外ではどうだろう。危険が迫っていると一方では報道し、その一方では集客に走る企業や自治体。東京都知事は何を考えているのかと疑問でならない。巨大地震がこわくて原発はほとんどが停止した。それなのに東京に人を呼び集めようとする意図というか気持ちは到底

理解できるものではない。

## 日米まやかし条約

---

はじめに、私は左翼の人間ではなく、したがって中国やロシア寄り人間ではないことを宣言しておく。

沖縄の前知事であった稲嶺知事、大田知事がそろって米軍沖縄県内移設に反対の声を上げた。沖縄県人の声を無視し続ければ日米安保も危うくなると。日米安保は日本人を分断しようとしている。

その日米安全保障条約であるが、素人が見てもおかしなところが多すぎる。少なくとも日英同盟に比べて曖昧な点が多すぎる。日英同盟は第二次世界大戦前の同盟ではあるが、日英のどちらか一方が第三国から攻撃を受けた場合は、それがどこの国であろうと直ちに来て協同戦闘に当たる、と名言している。自国の憲法の規定と手続きに従って、などというあいまいな日米安保とは明快さがまったく異なるのである。

尖閣諸島に中国の漁船が領海侵犯して海上保安庁の巡視艇に体当たりするという事件が起こった。私が首相であればその時点で撃沈せよと命令を下したと思う。ところが、撃沈どころか中国の船長を中国の恫喝によって釈放してしまった。日本政府は、うろたえた表情を浮かべながら「私はビデオを見ていません」と言う。そうして、「釈放は検察の判断でなされた」と逃げた。まるで蚊の泣くような声で「領土問題は存在しません」と繰り返す。

中国にとってはこれほどやりやすい国はないと思ったろう。十分学習することができたからである。これからはもっとやりたい放題に暴れるだろう。美人を見たら我が女房、と言い張る中国人。なんとしたたかなことか。

日米安保なんてなくてもいいという人がいる。尖閣諸島問題で日本が中国船に発砲してもアメリカはおそらく知らんふりを決め込むだろう。もしも中国が領海侵犯をして日本と同じくアメリカも一緒に攻撃しようとするれば、大統領が軍事力の行使を決意して、連邦議会に諮る。議会が承諾して初めて武力行使ができる。しかし、連邦議会はアメリカ国民の世論によって動く。アメリカの世論が尖閣諸島の防衛を支持するだろうか。小さな島をめぐるアメリカは立ち上がるだろうか。私はあり得ないと思う。しかし、石垣島とか宮古島までが危うくなればアメリカは防衛に立ち上がるだろう。アメリカという国は日米安保を締結している友好国であるのに、尖閣諸島だけが攻撃されても応援してくれないということを日本政府がわかれば、日米安保は砕け散ってしまうに違いないからだ。

一方、アメリカにも言い分はある。それは集団的自衛権についての言い分だ。日本の駆逐艦とアメリカの駆逐艦が並んで中国に武力攻撃を加えようとする。しかし、日本の駆逐艦が攻撃されれば自動的にアメリカは助ける義務があるのに、アメリカの駆逐艦が中国に攻撃されても日本の駆逐艦はアメリカを助けることができない。これだとアメリカはおもしろくない。日本は自分が攻撃されないかぎり、憲法の拘束によって助けることができないきまりになっているからだ。

こういう不平等な条約でも、日本政府はアメリカに対して悪びれない。なかなか狡猾な日本政府である。こういう狡猾な日本の態度にアメリカ国民が気づいたら、決して日本を応援せよとい

う世論にはならないと思う。しかし、アメリカ政府も黙ってはいない。いつ暴落するかわからないアメリカ国債を買わせ続けているのだ。日本はただひたすら忍従するしかない。親分とパシリの関係といった方がいいかも知れない。

戦力を持たないのに軍事同盟を結ぼうとする日本もそうだが、はいそうですね、というアメリカもしたたかである。アメリカには、日本に米軍基地を展開できさえすれば自国の防衛に役立つという狡猾さがあるのだから。要するにまやかしの条約であり、だましあい条約である。

何十年たっても、まわりの国に腰をかがめ、顔色をうかがい、揉み手をしてこびを売る日本政府。波風さえ立たなければよしとする日本外交（外交とは呼べない）が相変わらず続いている昨今である。県内移設をゴリ押しすれば、沖縄の人々もおそらくキレるだろう。どうやってキレるかという、日米安保がいかにかまやかしと欺瞞に満ちたものであるかを国民に訴えるというキレ方である。アメリカの傀儡とも呼べる日本政府の反論が見ものである。

## 都心のスカイツリー

---

東京スカイツリーが今年5月に完成する。634メートルという恐ろしいほどの高さである。東京という大都会の中にこのような高い建物ができるというニュースを聞いて、西欧の物まねではないのかと思った。

ヨーロッパの景色をテレビでよく見るが、ヨーロッパの街と言えば、大きな城壁があり大聖堂がある。大聖堂には高い塔がある。そして、広場があり石で舗装された道路がある。どんなに狭い路地でもすべて石畳やコンクリートで舗装された道路である。

見上げれば窓下に洗濯物が干され、窓から外の光景を眺めている老夫婦が見える。道にはアーケードがありテーブルや椅子が置かれ、昼からワインを飲んでいる人もいる。高い建物や塔が空に描く輪郭線すなわちスカイラインは青空に映えて美しい。温暖な気候に古めかしい建物。いかにもヨーロッパという気がする。

同時に、いかにも人工的な街という気もする。緑も地肌も見せないほど人の手が加えられているからである。そこでは、その地域の中で都市そのものが独立した造形物として存在している。

それに対して、日本はどうか。山のふもとや盆地に集落を築いた日本人は、自然のふところに抱きかかえられるように生活していた。周囲は山や丘陵や川である。自然と密接につながって集落ができていた。そして、人工的な建造物はなかった。寺院の塔も丘陵の上に建てられ、木立の中に隠れるように存在した。天守閣でさえも丘陵の上にある。土のおいがる町並みがどこまでも続いていた。広場もなく眼を瞠るような高い建物などない日本の町であった。

それは、日本と西洋との宗教観の相違かもしれない。天国に伸びるように建てられた塔と、そうではない日本の塔。したがって、江戸の町は中心のない、まとまりのない町だったのかもしれない。しかし、それはあちらこちらにランドマークとなる建物を作らせた。それらのランドマーク的建造物が互いにつながり合っ、ひとつの構造を作っていたと考えられる。その中には富士山も含まれていた。思うに、ひとつのパノラマを作ろうとしていたのかもしれない。

言ってみれば、西欧は街の中心に高い建造物を作るという発想であり、日本は周辺に目立つ建物を作るという発想である。それは、求心的発想と遠心的発想の違いと言える。したがって、今回の東京スカイツリーは古来の伝統を打ち破った新しい発想とでも言うか、あるいは、単なる物まね的発想だったのかもしれない。

中学校の年間授業時数はほんの数年前までは980時間であった。そうしてようやく指導要領が改訂されて、1050時間となった。週に30時間。一日6時間。年間35週間。30時間×35週で1050時間である。ほんの数年前は週に28時間であった。980時間にしても1050時間にしても、その中には総合的な学習の時間（総合学習）が2時間ほど入っている。教科書も何もない時間だ。国際理解とか地域の文化など総合的に学ぶ時間とされる。その背景には「個性を生かす」という考え方がある。個を伸ばすという考え方はアメリカ軍のGHQの考えだったが、それを日教組が受け継いだ。

こうして「ゆとり教育」が生まれたが、学力は驚くほど低下した。最初からわかりきったことではあるが。現在、日本の生徒は「世界一勉強しない国の生徒」と呼ばれている。恥ずかしいとは思わないのだろうか。では、勉強しないで何をしているか。学校の休み時間、校庭でボール遊びなどしなくなったそうである。そんな体力を使う遊びではなく、廊下に座ってひたすらケータイだそうである。ケータイのゲームに夢中なのだそうだ。義務教育の段階でさえ学校にケータイを持ち込ませている学校が数多くある。

勉強し、将来これがしたいという志を持つ生徒は国際統計ではかなり低い位置にある。アメリカやイギリスへの留学を希望する生徒も中国や韓国の半分以下だという。偉くならなくていい、身近な幸せを手に入れさえすればいいのだそうだ。外車を乗り回しながら給食費を払わないモンスターペアレンツはますます増加しているという。科学技術立国日本は今や風前の灯火なのである。

そうしてようやく今になって、戦後の教育基本法（GHQによる）で個の尊重とか個性が重視されすぎたとか、子どもの数が少なくなるにつれて過保護が増えた、体罰を禁じられた教師が強制力と指導力を失った、ゲームやケータイ、ネット、アイポッドなど遊び道具に恵まれすぎた、人間は平等ということから上下関係がなくなりすべて友だち関係になり、先生や親の権威を失った、教科書のページ数が少ないので子どもは家で勉強する必要がなくなった、勉強していい大学に入っても安定した収入を得ることはできず、幸福も保証されない。勉強なんてばからしいと考えるようになった。

これらが世界一勉強しない子どものおもな理由である。先生は生徒より偉い、親は子どもより偉い、という当然のこのの前に、「人間みな平等」の考えが立ちはだかる。

私は1050時間で適正だと個人的には思う。ただし、総合学習は廃止すべきだ。教科書という指針もない、ともすれば教師の都合で動く時間は授業ではない。知育偏重などというが、もしそういうのであれば、ゆとりの世代がどんな「いばらの道」であえいでいるか、その実態を見てみればいい。知育のいかに大切であるかが一目瞭然である。

同時に、個性尊重で甘やかす日教組の親玉には早く辞任していただきたい。教育に思想信条の持ち込みは禁物である。少なくとも、学校の現場に「ごまかし」は持ち込まないでほしい。



## つれづれの日々

<http://p.booklog.jp/book/45595>

著者 : t-mikami

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/tetujin228/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/45595>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/45595>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.